

目次

序文	国連事務総長 コフィー・A・アナン	4
世界の子どもたちへの約束	ネルソン・マンデラ、グラサ・マシェル	6
2001年世界子供白書：幼い子どものケア		
子どもの人生の最も早い時期——出生から3歳になるまで——に起こることが、その後の子どもの生活や青年期の生活に影響を与える。だがこの大切な時期は国の政策、プログラム、予算の面で、どちらかという無視されてきた。『2001年世界子供白書』では世界中からの報告に基づいて戦争、貧困、HIV / エイズの流行に苦しめられながらも、幼い子どもの権利を守り、ニーズを満たそうと努力している親や保護者の日々の暮らしについて詳しく取り上げた。		
なすべき選択：この章では、脳の発達に最も影響を受けやすく、権利が最も侵害されやすい誕生から3歳までの時期に投資する必要があることや、いつどこに投資して3歳以下の子どもの権利を守り、そのニーズを満たすかについて政府が取り得る選択を示す。乳幼児の発達プログラムが子どもやその親、保護者だけでなく、国全体の前進にとって重要だという点についても取り上げる。		8
必要な選択：貧困や暴力、致命的な疫病に悩まされ、親が子どもに夢や希望を託せなくなっている国で、つまり幼い子どものケアを保障するのが最もむずかしい国で、それを保障することが最も必要になっている。この章では乳幼児のケアが暴力、紛争、貧困、HIV / エイズの悪循環の輪を断ち切るための効果的な手段になり得ると主張する。		26
責任ある唯一の選択：親たちはしばしば大きな困難のなかで子どもにとって最善のことをしようと努力してきた。親たちは先進工業国でも開発途上国でも、子どものための革新的なケアプログラムについて、非公式の支援ネットワークやコミュニティを代表する人々から意見や助言を得ている。この最終章ではそれらの実験的な試みや経験について取り上げ、ECD(Early Childhood Development=幼児ケア)への投資が長期的には引き合うものになる理由を示す。		40
ECD		
1 定義		15
2 成功するプログラム		15
3 単一の公式はない		48
4 第一歩		52
囲み記事		
1 脳の早期の発達：創造力の触発		12
2 ネパールでの家族と子どもの権利に関する参加型の調査		16
3 健康な妊娠：女性と子どもの権利を守る		18
4 パバ・イニシアチブ：父親とともに子どもの暮らしを改善する		22
5 父親の育児休暇、沐浴、そして悪霊		24
6 価値が価値でなくなる時代の渦——エルネスト・サバト		36
7 インドの子どもの権利を守る		44
8 子どもの生存と女性の行動——アマーティア・セン		54

国のプロフィール

1 ジャマイカの農村で	23
2 旧ユーゴスラビア・マケドニアの幼い難民	31
3 マラウイの育児習慣	32
4 トルコの効果的な育児	35
5 フィリピンでの各種のサービスを統合する	49
6 ベルギーの働く親のための「ワフ・ワシ」	50
7 子どものためのモルディブのメディア文化	53
8 早期発見の重要性：ヨルダンの場合	56

図

図1 脳の発達：重要な時期	11
図2 幼い子どもの権利	14
図3 早期の栄養の短期的、長期的効果	18
図4 飢餓が母体に及ぼす影響	18
図5 早期のケアが発育阻害の影響を緩和する	19
図6 母親の識字と子どもの発達	20
図7 HIVと5歳未満児の死亡率	38
図8 環境中にみられる子どもの健康への危険	39
図9 3年生の算数のテストの得点	46
図10 「ヘッドスタート」プログラムの概念の枠組み	47
図11 基礎社会サービスを脅かす債務の影	51

地図

子ども時代の初期の生活の質の指標、女性の地位と子どもの福祉の関係、子どもの成長と発達のための課題の3つを図示した。

統計

193カ国をアルファベット順に配列して、地域別の要約と世界の合計を加えた8つの表に子どもの福祉に関する入手可能な最新のデータを示した。各表には、1999年の推定の5歳未満児死亡率の順位(高い順)を示した。

基本統計	70
栄養指標	74
保健指標	78
教育指標	82
人口統計指標	86
経済指標	90
女性指標	94
前進の速度	100

参考文献 57

序文

2001年9月の「国連子ども特別総会」は確かに、いくつかの点で特別の総会になる。この特別総会は世界の子どもや若者の暮らしを形づくる可能性をもっている。この総会には国連の今後の活動のあり方となるべき幅広い参加とパートナーシップのモデルとして政府の指導者やNGO(非政府組織)、子どもや若者が参集して、国際社会がすべての子どもの権利の実現に必要な措置を促進することを求める行動計画に合意する。

今日では、無数の子どもが10年前——1989年に「子どもの権利条約」が採択され、1990年に「子どものための世界サミット」が開かれる以前——よりも安全で、健康で、充実した暮らしをするようになった。1979年に「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」が採択されてから、無数の女性が経験した前進についても同じことがいえる。それにもかかわらずいまなお、あまりにも多くの子どもと女性が社会の保護を受けられずに暮らし、あまりにも多くの人々の権利が踏みじられ、脅かされている。

特別総会では「子どものための世界サミット」での約束や歴史上最も多くの国によって、最も迅速に批准された人権規約である「子どもの権利条約」に基づく義務を実現するうえでの前進についての検証がなされる。この検証は厳しいものになるに違いない。だがこの特別総会は、過去の成果を検証するだけでなく、将来に目を向けるものになる。総会では私たちの今後10年間の主な目標——つまりすべての子どもと女性の権利を守り、実現するという目標——を達成するために、期日を決めた具体的な目標を決めることになる。

特別総会の議題は、すべての子どもが人生の可能な最善のスタートを切り、すべての子どもが質の高い基礎教育を受け、すべての子どもがもって生まれた能力を十分に伸ばし、社会に有意義な貢献をする機会を手に行けるようにするという、期待される3つの結果をめぐるすでに盛んな論議を引き起こしている。『2001年世界子供白書』では私たちの最初の目標、つまりすべての子どもが例外なく人生の可能な最善のスタートを切ることができるようにするという目標を中心テーマに選んだ。

特別総会の準備は強い目的意識によって活性化され、総会成功への期待が高まっている。準備には政府、国連諸機関、国際・国内の市民社会から約1000人が参加し、子どもと若者が最も明瞭かつ最も情熱的に発言してきた。

若者たちは地方、国、地域のレベルで、世界が子どもに対する義務をどのように果たしてきたかを評価するために、すでに意見を表明している。変化の担い手としての自分たち自身の役割についても話し合っている。2001年9月にはそれらの若者の多くがニューヨークに集まって、特別総会に参加する。私は、人々がそれらの若者の意見に注意深く耳を傾けることを期待するとともに、私たちがそれらの若者や世界の子どものために2001年のこの特別総会を新しいミレニアムの可能な最善のスタートにすることを望んでいる。



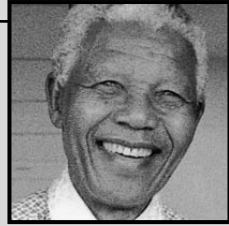
国連事務総長
コフィー・A・アナン

幼い子どものケア



米国で生まれたばかりの赤ちゃん。

Copyright Marilyn Noh



ネルソン・マンデラの約束

子どものころの最も初期の記憶は、南アフリカ南東部のトランスカイのなだらかな丘陵と緑の谷間のクヌ村に関するものです。私はそこで多くの赤ちゃんや子ども、叔母、叔父のいる大家族の中で少年時代の最も幸せな歳月を過ごしました。一度も孤独だと感じたことはありませんでした。

私はそこで父の生き方を通して正義感について学び、私はその後何十年も、この正義感もち続けています。私は父の行動を細かく見守りながら、自分の信念を貫き通すことを学びました。

クヌ村ではまた母が私に物語を読んで聞かせて私の想像力をかきたて、屋外で調理をしながら親切さや寛大さについて教え、私に食べさせ、私を健康に育ててくれました。私は少年時代から家畜の番をしながら、農村や広々とした野外の風景や自然の簡素な美を愛することを学んだのもその村

でのそのころのことでした。

私は少年時代に友人から尊厳や名誉のもつ意味についても学びました。長老の言葉を聞き、長老の集会を見て、民主主義や人々が発言の機会をもつことの大切さを知りました。私が属するコーサ族についても学び、保護者であり先達でもあるリーダー(指導者)からアフリカの歴史や自由を求めるアフリカの人々の戦いについても学びました。

私の長い人生の生き方を決めたのも、ごく幼いころのことでした。私は過去を振り返るとき、いつも父母や子どものころに私を育てていまの私にしてくれた人々への強い感謝の念をおぼえます。

私がそうしたことを学んだのは、子どものときでした。私はもう高齢で、私を励ましてくれるのは子どもたちです。

世界の子どもたちへの約束

私は愛する若いあなた方のまなざしやエネルギーに溢れた体に光を見出し、あなた方の心に希望を見出だしています。未来を築くのが私ではなく、あなた方だということも知っています。私たちが犯した過ちをただし、世界とともに正しいことを推し進めるのも、私ではなくあなた方なのです。

私が経験したような子ども時代をあなた方にほんとうに約束できるのなら、私はそれを約束します。あなた方一人ひとりに学習と成長の日々を約束できるのなら、私はそれを約束します。また戦争や貧困や不公平があなた方の両親やあなた方の名前や幸せな子ども時代をおくる権利を奪わないようにし、子ども時代があなた方を実り多い充実した生活に導くことをお約束できるのなら、私はそれを約束します。

ですが私は私にできることが分かっていることだけを約束します。私は今後も幼いころやその後学んだすべてのことを生かして、あなた方の権利を守ることを約束します。私が知っているあらゆる方法で毎日努力して、あなた方の成長を支援します。あなた方の声や意見を求め、他の人々もそれに耳を傾けるようにします。

グラサ・マシエルの約束

この『世界子供白書』は世界の子どもたちに捧げられますが、私は世界の子どもたちに、皆さんは私のライフワークの対象であり、あなた方の尊厳と自由と保護のために戦うことが、私の人生に最大の意義を与えてくれました、と申し上げたいと思います。

あなた方と私は互いに面識はないかもしれませんが、私は多年にわたって教員や活動家として働きながら、あなた方の暮らしについて多くのことを学びました。

私は1年間の就学が子どもをどのように変え、何年かの就学がいかに子どもの未来を変えるかを見してきました。私は教育の力が家族を貧困から、赤ちゃんを死から、女の子を奴隷のような暮らしから救うのを見してきました。私は自分の人生を通じて、

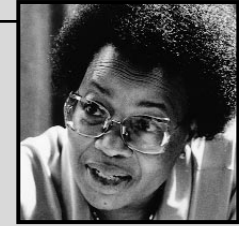
一つの世代の子どもが教育の力で国を改善するのもみてきました。

同時に、幼い命や未来がいかに速く破壊され得るかもみてきました。戦争やHIV / エイズ、貧困はすべての人に犠牲を強いますが、とくに子どもを最も深く傷つけるということを私は知っています。あなた方の学校や保健所など、若者にとって安全であるべき場が凶徒に襲われていることも私は知っています。あなた方の両親、先生、医師、看護婦など、あなた方が大切に、最も頼りにしている人々が紛争で攻撃の目標にされ、エイズで打ちめられていることも知っています。

私は幸運にも世界を旅して若者たちからその生活や体験について聞くことができ、多くの若者が親切に話してくれました。私は若者たちから、戦争があなた方の愛する人を奪い、あなた方の理想や夢を打ち砕くのを、どのように感じているかを聞くことができました。食べ物や十分に得られず、学校に行けず、当然の保護も受けられない多くの少女の話も聞きました。私は不公平がどのように感じられ、人生が不公平だということに気付いたときの痛みがどんなものかを知っています。

ですから、次のことをお約束します。私はあなた方の教育に努力して、あなた方があらゆる機会を得てあなた方の歴史について知り、あなた方が想像力を働かせて、さまざまな人々の物語を書けるようにすることを約束します。私は知識や学習が自由をもたらすことをあなた方が直接の体験を通じて学ばれることを望んでいます。

私は戦争に反対し、エイズを防ぎ、あなた方の両親やあなた方の純粋さ、あなた方の子ども時代を奪う、口にするのも恐ろしいすべての敵に立ち向かうために努力することを約束します。あなた方が地雷や拉致や危険を恐れずに家を出て、安全を保障され、家畜の世話をし、バケツに水を汲めるようになるまで、政府の指導者や実業界の人々にそのことを訴え、要求し続けることを約束します。それがあなた方の日々の現実ではなく、古い昔話の材料になるまで、休むことなく努力することを約束します。



少年少女の皆さん、若い男女の皆さん、あなた方は私の最も緊急の関心事です。人生で他人よりも抜きでるための機会を与えられ、健全な心身をもって暮らしの課題に立ち向かうことができ、教育という自由へのパスポートを与えられることが、どんなことであるかを私はよく知っています。私はあなた方がそのすべてを自分自身で体験されることを望んでいます。

私たちの声と 子どもの声をつなぐ

ネルソン・マンデラとグラサ・マシエルの誓い

私たちのかけがえのない子どもたちの皆さんへ

私たちは母や父、祖父母、曾祖父母、政治家、活動家として、あなた方に宛てて次のことを書き送りたいと思います。あなた方は私たちの希望の核心であると同時に怒りの核心でもあります。あなた方はまた私たちのかけがえのない子どもであり、私たちを未来につなぐ唯一の担い手でもあります。

あなた方の一人ひとりが人格をもち、尊重すべき権利と尊厳を賦与されています。あなた方の一人ひとりが人生の可能な最善のスタートを切り、最高の質の基礎教育を修了し、持って生まれた可能性を十分に発揮することを許されて、それぞれのコミュニティに有意義な参画をする機会を与えられなければなりません。ネルソン・マンデラとグラサ・マシエルはあなたがだれであろうと、あなた方の一人ひとりがそれらの権利を享受できるようになるまで、決して休むことはありません。私たちは約束します。

私たちは約束を守ることを誓います。

ネルソン・マンデラは南アフリカの前大統領で、ノーベル平和賞受賞者。グラサ・マシエルはモザンビークの元教育相で、武力紛争に関する国連の特別専門家。2人はともに「子どもたちのためのグローバルパートナーシップ」を唱導している。



なすべき選択

子どもが3歳になるまでに脳の発達がほぼ完了する。新生児の脳の細胞は多くの成人が何が起こっているかを知るずっと前に増殖し、シナプス(神経細胞相互間の接続部)による接合が急速に拡大して、終生のパターンがつくられる。わずか36カ月の間に子どもは考え、話し、学び、判断する能力を伸ばし、成人としての価値観や社会的な行動の基礎が築かれる。

生後の何年かは子どもの人生にとって、非常に大きな変化の時期であり、長期的な影響をもつので、子どもの権利の保障は子どもの人生のスタートの時点で開始されなければならない。この大事な時期に子どものためにどのような選択をし、行動をするかが、子どもの発達だけでなく、国の前進に影響を与える。

人間開発のための妥当なプランは子どもの権利を守るための行動をせずに子ども時代の18年が過ぎるのを無為に待つことはできないし、子どもの人生をより豊かにするための努力に最も適した出生から3歳になるまでの期間をむだにすべきでもない。

子ども時代の初期は、責任ある政府が最大の優先的関心を払って法や政策、プログラム、資金の面での決定を下すに値する。にもかかわらず子どもと国の双方にとって悲劇的なことに、この時期の子どもに対しては最も関心が払われてこなかった。

写真：2000年の初めにモザンビークで洪水の最中に生まれた双子の赤ちゃん。



GOがユニセフの支援を得てマタレから25キロほど離れたアムパンガという寒村で実施している家庭で行うプログラムに参加している22家族のうちの一つである。シウワマは「楽しい子育て」という意味で、このNGOは健全な育児法や認知刺激を含む幼児の早期ケアを推進し、家庭訪問プログラムを通じて3歳未満児や3～5歳の就学前の子どもにサービスを提供している。

プリヤンティはスリランカのこのサービスを通じて優れた栄養や家庭での衛生や衛生習慣、認知刺激のすべてが子どもの成長や発達に欠かせないことを知った。彼女はいまでは集中的に時間を割いて子どもの暮らしの改善に必須のケアをするようになった。子どものために薪を余分に集めて飲み水を煮沸している。豆類が子どもの食事の栄養価を高めることも知った。家族がトイレを使い、用便後に確実に手を洗うようにもした。小川で沐浴中に子どもに、頭上でさえずる鳥についてどう思うかと尋ね、子どもを村の保健デーに連れていくようになった。

プリヤンティの家族は電気も水道もないセメント造りの4室の小さい家で暮らし、夜は土の床にわらを編んだござを敷いて寝ている。家族は夫が茶の農園で働いて得る月2000ルピー(約27米ドル)の収入で何とか暮らしている。

シウワマのボランティアの家庭訪問員は、プリヤンティが多くの金を使わずに子どもの社会心理的・認知的発達を促進する方法を見つけるのを助けた。このNGOのボランティアはプリヤンティに遊びが子どもの心身の健康にとって大切であることを教えた。プリヤンティは夫とともに子どものためのおもちゃの家を作った。家は布切れで小枝や枝をしばって造り、防水シートで覆っており、風通しがいい。小さい木製の棚には色とりどりの箱、ひょう

「お店屋さんごっこ」をして遊ぶスリランカの親子。



Srinath Perera/Sri Lanka

スリランカのマタレに住むプリヤンティという28歳の母親は、娘のマウシカを7キロ離れたところにある最寄りの医療施設まで運んだ晩のことを覚えている。小柄なこの母親が腕のなかで苦しげに息をする生後18カ月の娘とともに心細い思いで家をでたのは午後5時ごろのこと、あたりは暗くなりかけていた。彼女は狭い泥んこ道をふさぐ枯れ枝や灌木につまずきながら歩いた。娘の息は弱々しかった。2人は6時前に診療所にたどり着いた。

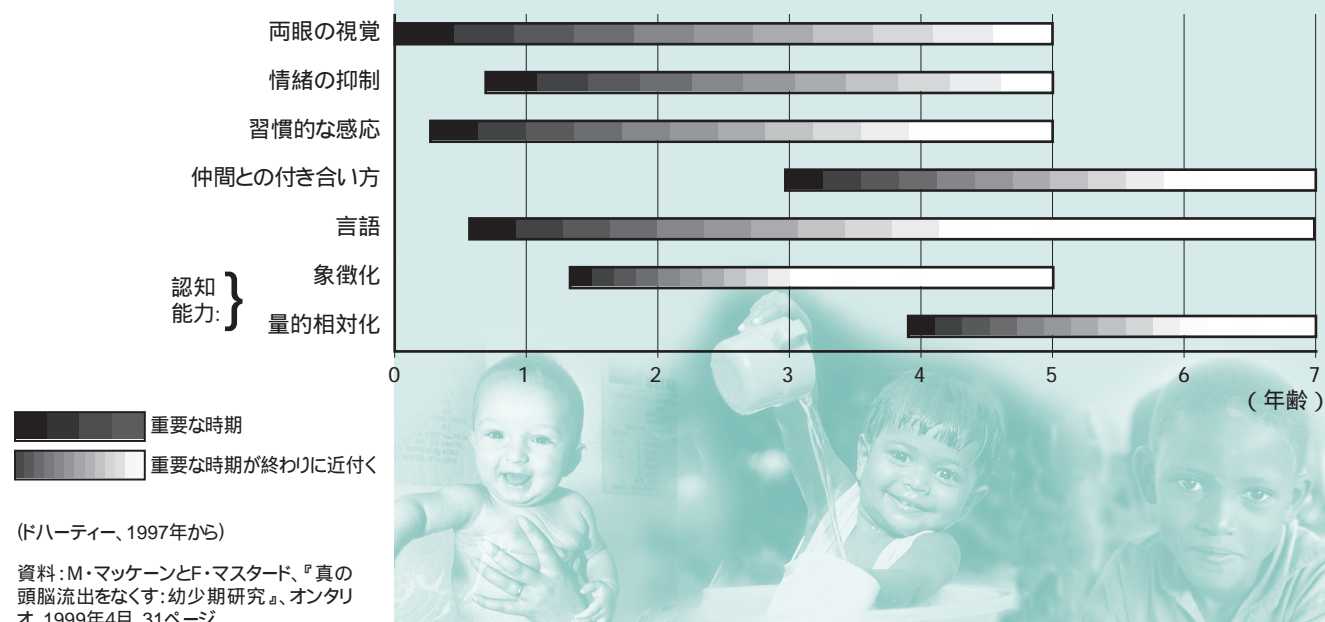
医師の言葉は疲れ切った眼をした彼女をいっそう苦しめ、時間との競争が続いた。ここに来るのが15分遅れていたら咳かぜがこじれて肺炎になって死んでいただろう、と医師に言われたのを、彼女はいまでも思い出す。マウシカはいま5歳で元気だが、10年前に生まれていたら、治療薬も手に入らず、肺炎に負けていたであろう。

プリヤンティの娘のマウシカやその弟のマウシヤはスリランカの保健サービスや幼児ケアプログラムの恩恵を受けてきた。2人は今日のスリランカで生まれる子どもの約90%と同じように病院の比較的安全な環境のもとで生まれた。この若い母親は今年2歳になる息子を身ごもったとき、村の診療所で定期的に検診を受け、妊娠について村の助産婦から助言を受けた。授乳のときに赤ちゃんに話しかけることが赤ちゃんの心身の発達を促すことや、赤ちゃんの声に responding して「マザリーズ(お母さん言葉)」で優しくささやきかけることによって、赤ちゃんが言葉を覚えるのを早められることも知った。

プリヤンティと息子のマウシヤは退院後、訓練を受けたボランティアによる家庭訪問プログラムに参加し、定期的にマウシヤの身長や体重を測ってもらい、息子の入浴や食事だけでなく、息子に触れ、話しかけ、歌うことの大切さについて引き続き支援と助言を得た。

プリヤンティの家族は、シウワマという地元のN

図1 脳の発達:重要な時期



たん、ココナツの殻、焼き物の椀、金属の缶やみんなで摘んできた花がたくさん並べられている。マウシカとマウシヤの2人はそこでの遊びを通じて色や形、大きさ、分類などのほか、夢や想像することについても学んでいる。

プリヤンティは毎週、ボランティアと会い、月に1度は親たちのグループの集まりに参加して互いに学び合い、子どもの身長や体重などの記録を比較合っている。日々の暮らしのなかで目を覚ましたとき、食事中、体を洗ったり入浴しているとき、調理や外出、屋外で働いているとき、遊んでいるとき、就寝前など、子どもに物事を教えることのできる機会についても話し合っている。

プリヤンティの家から1キロ以内のところ、子どもの早期ケアプログラムに定期的に参加していない家族が暮らしている。33歳の農民のウイマラトネは最近になって家庭訪問プログラムのことを知り、娘のサシカを参加させたいと思っている。2歳のサシカは見知らぬ人が家に近づいてくるとすぐに泣きだす。7歳の兄のアサンカがサシカを抱き上げると、サシカは怖がって兄にしがみつくと一言も口をきかない。刺すような黒い眼は見知らぬ人の方を見つめたまま2人ともまるで口をきかない。父親のウイマラトネはこの2人は内気だが、よく一緒に遊んでいるという。

ウイマラトネは明らかに娘の発達を心配しており、妻のクスマワティ(30)に娘の発育グラフをみようと言った。グラフは娘の体重と身長が生後思うように増えず、この年齢の子どもの平均を下回っ

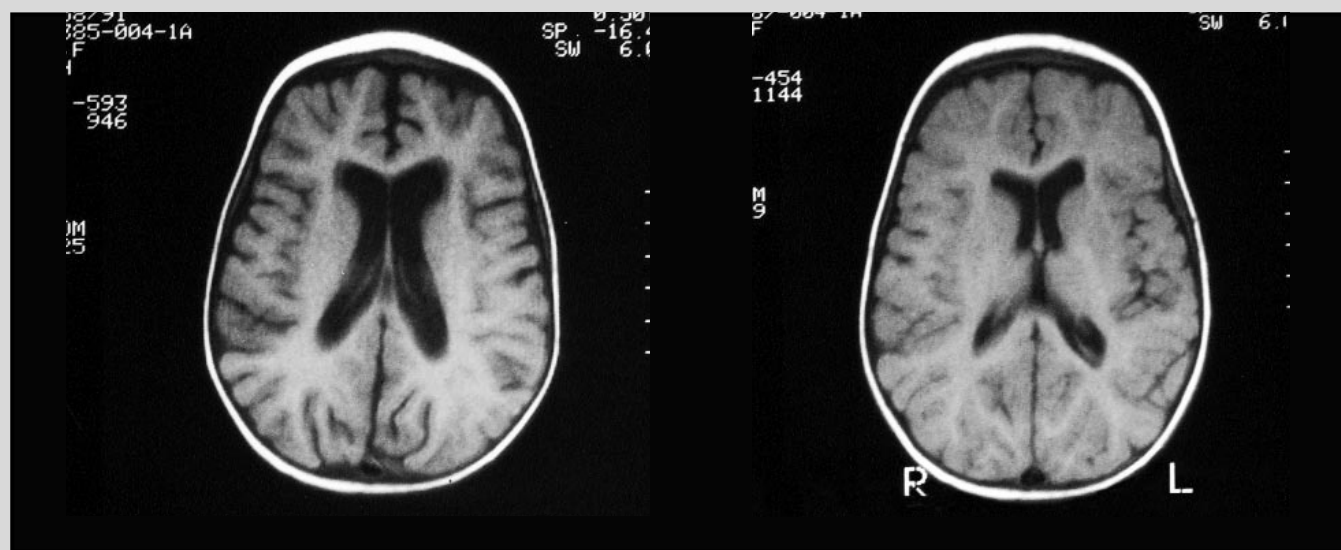
ていることを示している。ウイマラトネは、サシカの発育の遅れを心配した医師から家庭訪問プログラムに参加するように勧められたと語った。

この2つの家族は同じ村で暮らし、同じような状況のもとにあるが、子どもの状態は大きく違っている。マタレの家族は世界の多くの家族と同様に貧しい。大多数が零細農民や近所の工場や茶の農園で働く臨時の労働者である。子どもの99%が予防接種を受けているが、40%近くが栄養不良である。子どもの早期ケアプログラムに参加している家族もあるが、多くの家族がそれに参加していない。

0～3歳の時期の重要さ

生まれた瞬間やその後の数カ月から数年間は、幼い子どもが暮らしのなかで経験する接触、動き、情緒のすべてが脳内で爆発的な電氣的、化学的活動に変換され、脳の何十億もの細胞がネットワークに組織され、何兆ものシナプスで結ばれる(囲み記事1)。子ども時代の初期には親や家族やその他の成人との間の経験や対話が子どもの脳の発達に影響し、十分な栄養や健康やきれいな水などの要因と同じくらい大きな影響力をもつ。この期間に子どもがどのように発達するかがのちの学校での学業の成否を決め、青年期や成人期の性格を左右する。

乳児は抱かれ、触れられ、愛撫されると、よく成長する。子どもに応える暖かいケアがある種の保



母親が手のひらで隠していた顔を突然のぞかせたとき、強い期待をもって見つめていた赤ちゃんが喜びの声をあげるのを見たことがあるだろうか。この簡単に見える動作が繰り返されると、発達中の子どもの脳のなかの数千の細胞が数秒のうちにそれに反応して、大いに劇的な何かが起こる。脳細胞の一部が「興奮」し、細胞同士をつなぐ接合部が強化され、新たな接合が生まれる。

脳内の細胞の接合は生後3年間に爆発的に増殖し、子どもは目覚めている事実上すべての瞬間に新しい事柄を発見している。新生児は1000億個の脳細胞をもつが、大部分が互いに接合されておらず、脳が機能するためには神経細胞の相互間の何兆もの接合部(シナプス)によって脳細胞がネットワークに組織されなければならない。

人体の奇跡ともいえる脳細胞の接合は部分的には遺伝子に、部分的には幼いころに起こったことに左右される。さまざまな経験が幼い脳の発達の方に影響するが、早期のケアや養育ほど重要なものはない。

デリケートな踊り

子どもの脳は生活の物語が書き込まれるのを待つ真新しい石板でもなければ、非情な遺伝子が計画し、支配する配線済みの回路でもない。

脳の発達は脳細胞分裂が始まるその瞬間から、遺伝子と環境とのデリケートな踊りである。遺伝子は正常な発達の道筋を事

前に決定するが、発達の質は妊婦や授乳中の母親、乳児に影響を与える環境要因によって左右される。栄養や健康、きれいな水、そして、暴力や虐待、搾取、差別のない安全な環境などがすべて脳の成長や発達の仕方に影響を与える。

人間の脳のユニークさはその大きさや複雑さにあるだけではなく、脳が経験との間で相互に強く影響し合う点にある。すべての触感、運動、情動が電氣的、化学的活動に転換され、それが遺伝のはずみを変化させ、子どもの脳のなかの配線の仕方を微妙に変える。脳内の接合の発達では摂取する食物、耳にする音、物を見る光と同様に人間の相互作用が重要な役割を果たす。

タイミングの重要さ

人間の生涯には脳が新しい経験に対してとくに開かれ、体験をとくに生かせる時期がある。脳が待つ刺激を受けることなくそうした敏感な時期が過ぎると、学習の機会が大きく失われることがある。

そうした「決定的な期間」がいかに重要で、発達の個々の分野で機会の窓がどれほどの期間、開かれ続けるかについてはなお議論がある。

私たちは人間の脳が柔軟で、生涯を通じて再編の力を保ち、外からの働き掛けでそれを強化できることを知っている。だが脳が子ども時代の初期に再び訪れることのないスピードで形成されるとい点については

で幅広いコンセンサスがある。

発達に最も適したとき

脳が柔軟だということはまた、否定的な経験や適切で優れた刺激がないことが重大な持続的影響をもち得る時期があることを意味する。発達に最も適したときに子どもが必要なケアを受けず、飢餓、虐待、放置にさらされると、脳の発達が損なわれる恐れがある。緊急事態や避難または紛争後の混乱のもとで暮らす多くの子どもは深い心の傷を負い、異常なストレスのもとにあり、そのような条件が幼い子どもを衰弱させ、少数のシナプスだけを興奮させ、脳の他の部分の活動を停止させる。幼いときにはそうした活動の停止が発達のはずみを失速させる。

予防が最善

子どもの暮らしの質を改善するのを手助けするのに遅すぎるといことはないが、早期の支援は子どもの発達や学習に最も大きな効果をもたらす。適切で時宜を得た質の高いプログラムによって子どもに有効な経験をさせ、親を支援することによって、子どもの発達を促進することができる。支援には、よちよち歩きの子どもたちに物語を読んで聞かせ、最初の子どもが生まれたばかりの家庭を訪問するなど、若い父母が新生児の発するシグナルをより正確に理解できるようにするためのさまざまな有効な例がある。

消すことのできない刻印

早期ケアや養育は子どもがどのように成長して成人するかや、どのように能力を伸ばし、学習して、感情をコントロールできるようになるかに、決定的で拭い去ることのできない影響を与える。

人生ののちの段階で基礎的な能力を伸ばすことは確かに可能だが、成長するにしたがって、より困難になる。乳幼児期に基本的ニーズを満たされない子どもはしばしば不信感を抱いて、自分や他人を信じられなくなる。早い時期に指導を受けて自分の行動を観察し制御するようにならなければ、就学するときに不安に陥り、怯え、衝動的になり、行動が支離滅裂になり得る。

脳はすばらしい自己保護と回復の機能をもっている。だが子どもが生後最初の数年間に受ける愛情に満ちたケアや養育、あるいは、そうした大事な経験がないことが幼い心に消すことのできない刻印を残すことになる。

護機能を果たして、乳児がのちの暮らしで受けるストレスの影響に対してある程度の「免疫」になるようである。だが幼いときの脳の柔軟性はまた、必要なケアを受けられず、飢餓、虐待、放置を経験すると、脳の発達が損なわれ得ることを意味する(囲み記事1)。

出生前や出生後の数カ月から数年間の子どもの暮らしに起こることの影響は生涯にわたって続く¹⁾。子どもが学校や生活全体を通じてどのように学び、人間関係を形成するかを決める、信頼感、好奇心、志向性、自制心、関係の構築、意思疎通や協力の能力など、情緒的知能の主な構成要素のすべてが親や保育施設などの教員や保護者から受ける早期のケアに左右される²⁾。もちろん子どもが健康や発達を促進し、新しい技能を学び、恐怖を克服し、固定観念を変えるのに、遅すぎるということはない³⁾。だが、子どもは適切なスタートを切ることができないと、遅れを取り戻したり、もって生まれた可能性を最大限に発揮するのが非常にむずかしくなる。

なぜ投資が必要か：子どもの権利や人間開発⁴⁾という大目的が幼児期に投資することの議論の余地のない根拠になる。神経科学も生後の3年間がその後の人生に影響を与えることを立証して、反論の余地のない根拠を示している。

さらに⁵⁾説得力をもつ経済的な論拠もある。生涯にわたって生産力が高まり、子どもが成人してからの生活水準が改善し、教育の遅れを取り戻したり、保健やリハビリテーションのサービスを提供

予防接種の注射で弟が泣くのではと思って耳をふさぐ
グルシアの女の子。



写真：南アフリカの病院で乳児期栄養不良の治療を受けた12歳の幼児(年齢の中央値は14~15カ月)の脳のMRI(核磁気共鳴映像)画像。左の像は入院時にすべての幼児に見られたもので、脳が収縮して脳の構造にさまざまな異常が生じている。右の像は90日間の栄養リハビリ後のもので、幼児のほぼ全員が脳の構造の点で回復したことを示している。

資料：G・D・カンストンほか、「クワシオルコルの子どもの回復可能な脳の収縮：MRIによる調査」、『子どもの病気の記録』1992年、67:1030-1032。BMJ出版グループの許可を得て転載。

0～3歳児:

- 身体的危険からの保護。
- 十分な栄養とヘルスケア。
- 適切な予防接種。
- 愛着をもつことのできる成人。
- 気持ちを理解し、応えてくれる成人。
- 見て、触れて、聞き、嗅ぎ、味わうことのできるもの。
- 自分の世界を探る機会。
- 適切な言語刺激。
- 新たな運動、言語、思考能力獲得のための支援。
- 自立心を伸ばす機会。
- 行動を抑制する仕方を学ぶための支援。
- 自己のケアを学び始める機会。
- 毎日、多様な対象と遊ぶ機会。

就学前の子ども。上記のほかに:

- 細かな運動能力を伸ばす機会。
- 話し、読み、歌うことを通じた言語能力の強化。
- 達成感を育てるための活動。
- 協力、支援、分かち合いについて学ぶ機会。
- 予備的な読み書き能力の確認。
- 行動を通じての積極的学習。
- 責任をとり、選択をする機会。
- 何かを成し遂げるために自制、協力、忍耐の能力を培うことを奨励。
- 自分に価値があると思う気持ちの強化。
- 自己表現の機会。
- 創造性の奨励。

小学校低学年の子ども。上記のほかに:

- 運動、言語、思考能力の強化。
- 自立心をさらに強める機会。
- 自分で自分のケアができるようになる機会。
- 多様な能力を伸ばす機会。
- 話し、読み、歌うことによる言語能力の強化。
- 多様な能力や概念の習得での達成感を強める活動。
- 他と協力し、他を支援することを学ぶ機会。
- 学習に役立つ物を操作する。
- 何かを完成するための自制心と忍耐力を養うための支援。
- 自分の成績に誇りをもちさせる。
- 学習意欲と学力の強化。

資料:『コーディネーターの手帳: 幼児開発のための国際資料』。幼児ケアと発達に関する協議グループ、第21号、1997年、7ページから。

写真(上から下へ): UNICEF/93-1987/Pirozzi; UNICEF/India/Osan; UNICEF/93-1151/Balaban

するためのコストが減り、親や保護者が労働市場により自由に参加して所得が増える。

社会的な理由もある。子どもの暮らしの最も早い時期に介入することが、社会を分断させている社会的、経済的不平等やジェンダーの不平等を緩和し、従来から排除されてきた人々を参加させるうえで役立つ。

政治的理由もある。世界経済のなかでの国の立場はその国の国民の能力に左右され、能力は子どもが3歳になるまでの早い時期に決まる⁽⁶⁾。

さまざまな選択

そのため、子どものために最善を尽くし、国のために最善を尽くそうとする指導者の選択は明らかのようにみえる。

子どもが例外なくすべて出生を登録され、暴力から守られ、十分な栄養やきれいな水、適切な衛生施設、基礎保健サービスを確保され、認知的・社会心理的刺激を受けて人生のスタートを切ることができるようにするか、それとも「子どもの権利条約」が定める道徳的、法的義務を放棄するのか。幼い子どもを養育する家族やコミュニティを支援するか、それとも次の世代を健康にし、その能力を高めて国を貧困から解放し、所得や教育や機会の致命的な不平等をなくすという希望を放棄するのか。

必要な資金を配分して、すべての子どもが子ども時代の初期の何年かの間に人生の可能な最善のスタートを切ることができるようにするか、それとも国を分断し、不平等を恒久化し、国民の福祉を損ない、結局は社会や国を破滅させるのか。

いま必要な支出を行って家族が幼い子どものために必要とする質の高い基礎サービスを受けられるようにするか、それともあとになって問題を解決するためにより多くの資金を注ぎ込むのか。

選択肢はこのように明快だが、いつも容易に目に見えるわけではない。貧困や病気、暴力、差別の世代を超えた悪循環は、人々の暮らしに深く根を下ろし、社会は石に刻まれたように不変で、希望と変化につながる循環は岩石層の下に埋もれて、見ることも、可能性を探ることもできないかのようである。

政府がそれらの機会にふさわしい投資をするこ

E C D
定義

ECD(Early Childhood Development = 幼児開発の略)は出生時から8歳になるまでの子どもとその親や保護者のための政策とプログラムに関する包括的なアプローチを指し、子どもがもって生まれた認知的、情緒的、社会的、身体的能力を十分に伸ばす権利を守ることを目指す。ECDには乳幼児のニーズを満たすためのコミュニティを中心としたサービスが不可欠で、サービスは家庭とコミュニティでの保健、栄養、教育、水と環境衛生への配慮を含むものでなければならない。こうしたアプローチは幼い子どもの生存、成長、発達の権利を守り、強化する。

ユニセフが今年の『世界子供白書』で0～3歳という子どもの成長の最も早い時期をテーマに選んだのは、この時期がそれ以後の幼児期に決定的な影響を及ぼし、しかもこの重要な時期が国の政策、プログラム、予算の点で最もしばしば無視されていることによる。

他の国際機関では次のような用語を使っている: 子どもの早期ケアと(初期)教育(ユネスコ)、子どもの早期教育とケア(OECD)、子どもの早期開発(世界銀行)。

との価値を認めたとしても⁽⁷⁾、解決すべき現実的な問題がある。幼い子どものニーズや不可分の権利は保健、栄養、安全な環境、社会心理的・認知的発達などの分野にわたっているので、子どものための早期サービスは一つの部門に分類することができない。また、部門を横断する総合的なアプローチを機能させるようなシステムが常に存在するわけでもない。その結果、子どもを育て、家族を支援する政府の責任が省庁や部門を隔てる壁の間から容易に脱落してしまう。3歳以下の子どもへのサービスは多くの人々の責任だということが理解されても、結局はだれの責任でもなくなってしまふ。

だからこそ子どもの権利が尊重され、国のニーズが満たされるようにするためにすべてのレベルの政府が決定を下し、行動を起こすことがますます必要になってくる。市民社会団体や企業、宗教団体、NGO、子どもや若者にも同様のことが求められる。社会のすべての分野のリーダーには次のことが求められる。

- 子どもの権利と福祉を優先する。
- 子どもの権利を守るための必須の第一歩と

して、子どもの早期ケアに十分に投資するうえで必要な資源を生みだし、捻出し、再配分する。

学齢期や青年期の子どもの健全な成長と発達のための基本的前提として、子どもがすべて人生の可能な最善のスタートを切ることができるようにするための責任や説明責任を割り当てる。

社会のリーダーがそうした責任を果たすようになるまでは、世界の子どもや若者やその親や家族の生活が公的政策不在の影響を受け続け、それが次の世代に引き継がれることになる。公的資源や予算上の決定が子どもと女性の権利を侵すのを国が許し続ける限り、子どもの現実や未来を変え、持続可能な開発を実現できる希望はほとんどない。また、人間の潜在力も十分に引き出せない。

E C D

子どもの多くの権利が不可分で、互いに

E C D

成功するプログラム

1. 「子どもの権利条約」の諸原則を取り入れ、非差別や子どもの最善の利益を守り、子どもの生存と十分な発達の権利や、子どもが自分たちの生活に影響するすべての事柄に参加する権利を保障する。
2. 「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」に基づいて、女性の権利を守ることが子どもの権利を守るための基礎になるということを認める。
3. コミュニティーや家族、社会構造、好ましい育児の習慣や子どもに最善のものを与えようとする親の強い気持ちをもつ力を生かす。
4. 幅広い枠組みをもち、保健や栄養、子どもの社会心理的・認知的発達のための多面的なプログラムを包含する。
5. 家族とともに家族のために立案され、女性の権利と、子どもたちが就学し、それぞれの子ども時代を楽しむ権利を尊重する。
6. コミュニティーとともにコミュニティのために立案され、文化的価値を尊重し、地域の能力を基礎にし、帰属と説明責任を明確にし、結束と力を奨励し、決定が確実に実施され、持続性がある。
7. 女の子や発達の遅れや障害の危険を抱えている子どもを含むすべての子どもが平等に利用できる。
8. 柔軟で多様性を反映し、地域や地方のニーズやそれぞれがもつ資源の量の違いが考慮されている。
9. 質の点で最高の基準を満たす。
10. 費用対効果比が高く、持続可能である。



UNICEF/88-039Nepal/Wright

「子どもはちょっと鶏に似ています。どちらも安全な環境と教導、食物、愛が必要だからです」。ネパールのビスクンダ村の4人の幼児の祖母は少し皮肉を込めてこう語った。素朴なこの言葉は多くの点で世界の無数の親の基礎的な知恵をあらわしている。父母のほとんどが子どもの発達や「子どもの権利条約」の諸原則について、正式の知識はなくても、自分たちの子どもが愛され、保護され、優れた健康や栄養や学習の機会を与えられる権利があることを知っている。

それにもかかわらずネパールでの最近の調査*では、親や子どもの発達の専門家の多くが、子どもが成長して貧困の悪循環を断ち切るようにするうえで非常に大きな重要性をもつ子どもの幅広い思考、自信、技能の発達のために親が日常的に果たす重要な役割を過小評価する傾向がみられた。

参加型の調査のモデルになったネパールでのこの調査では、調査員が子どもの権利の枠組みに基づいて4つの農村で親やコミュニティのリーダーと育児についての家族の考え方や慣習について話し合い、テーマを決めた討論を通じて子どもの権利を守り、コミュニティに即したECDプログラムを立案するうえで必要な情報を手に入れることができた。この調査で採用された親や家族との対話の方法が、その結果と同様に子どもの権利を守るうえで有効であった。

ネパールの子どもの取り巻く環境はさまざまである。一方では子どもの死亡率が高く、栄養不良の子どもが多く、衛生施設が不足し、屋内の空気が汚染されていて、学校教育を数年以上受ける子どもはほとんどいない。貧困と生存のための不断の戦いが適切な育児をほとんど不可能にしている。

他方では社会的、経済的困難にもかかわらず、すくすくと成長している子どももいる。多くの村の子どもが家事や農作業、家畜の番を通じて、自分に価値があり、社会的責任があることをよく自覚している。幼いときから労働と遊びと学習が完全に混じり合い、仕事が単調になり教育を妨げる前に労働を通しての積極的な学習が誇りや満足の源泉になり、望む能力を身につけ、他人を尊重する貴重な機会になっている。

そうした「プラスの逸脱」をどう説明したらいいのだろうか。この調査は家庭という自然な環境のもとでの子どもの発達の背景になっている微妙なプロセスに着目し、見たところ取るに足りない親の行動やさりげない対話が生徒の発達に貴重な影響を与えていることを見出した。たとえばある母親は毎日、長い仕事を終えて家に戻ると、すぐに4人の子どもと一緒に座って自分がとってきた魚の仕分けを手伝わせ、その間ずっと魚の特徴や大きさ、色、味について子どもと話し合う。子どもの言葉に耳を傾け、一人ひ

とりの子どものために小さいカニを持ち帰って、子どもたちがカニを競走させて遊べるようにさせる。

この調査は家族や村の生活よりも大きな背景にも着目して、村の状況や社会的・経済的現実、ジェンダーやカーストの問題、文化や変化の過程についても調べた。多くの点でその結果には何の驚きもなく、家族は当然のように子どもの暮らしのすべての側面に関心を払い、子どもの権利を守るために日々、最大の責任を負っていた。

ECDイニシアチブでは常にどのようにして、すべてをうまく機能させるかが大きな問題になる。そのため、この調査は子どもの権利の枠組みを取り入れて成人が家族、コミュニティ、地区、国のレベルで子どもの福祉を守る義務をどのように果たしているかを評価することを勧告した。

このアプローチの必須の要素は、子どもに関する主な問題について親やコミュニティのメンバーとの対話を行動の基礎とすることである。有益な、あるいは有害な育児の習慣が当然のことだとされてきちんと評価されていない場合がある。親たちは自分の考え方や日々の暮らしについて考え、それについて話し合う機会を捉えて、従来からあ

る力を強化し、協力して新しい方法を取り入れるために、自信をもって積極的な役割を果たし始めた。

子どもの発達の専門家と家族は互いに多くのことを学び合うことができる。子どもの権利のために働く人々の課題は、地域の慣習に重点を置いて親と協力し、親の関心事に注意深く耳を傾ける一方で、子どもの権利の原則と相入れないような慣習を明らかにし、それについて話し合う方法を見出すことにある。その結果、子どもにとって好ましい多くの伝統の間のバランスをとり、子どもの権利を損なうカーストやジェンダーに基づく伝統に立ち向かうべきである。「子どもがちょっと鶏に似ている」という意見を尊重しつつ、それを越えて前進することが求められる。

*育児に関するこの調査はセーブ・ザ・チルドレン連合のメンバー（ノルウェー、英国、米国）、ユニセフ、セト・グランズ・ナショナル・チャイルド・ディベロップメント・サービス、ニューヨーク市立大学の児童環境研究グループ、トリバン大学の教育革新・開発研究センターの共同のイニシアチブによるものである。

子どもの権利条約から

第6条

1. 締約国は、すべての児童が生命に対する固有の権利を有することを認める。
2. 締約国は、児童の生存及び発達を可能な最大限の範囲において確保する。

第18条

2. 締約国は、この条約に定める権利を保障し及び促進するため、父母及び法定保護者が児童の養育についての責任を遂行するに当たりこれらの者に対して適当な援助を与えるものとし、また、児童の養護のための施設、設備及び役務の提供の発展を確保する。

写真：ネパールの就学前教室の幼児と教員。

関連しているという事実に基づくECDプログラムが、子どもやその家族やコミュニティの健康と福祉を実現するうえでの最大の希望を生んでいる（ECDの定義については15ページを参照）。子どもは真空のなかではなく、コミュニティや文化や国のなかで発育し、発達する。

最も効果的なECDプログラム（15ページを参照）は総合的、多元的で子どもの健康や栄養を改善し、認知的・社会的・情緒的能力を高める。最善のプログラムは文化的価値を反映し、家族やコミュニティに深く根を下ろし、子どもの最適の発達にとって最善の環境について知られている事柄と伝統的な育児法についての理解を混合したものになる。

ECDはコミュニティのネットワークを築いて必要に応じてサービスの幅を広げ、緊急事態が生じたときにそれに対応できるようにするうえでも役立つ。

たとえばインドネシアでは1982年に人口・保健・栄養プログラムとしてBKB（ビナ・ケルアルガ・パリタ）プロジェクトが始まり、地域のセンターで子どもの身長と体重を測り、子どもに栄養の豊かな食事を与えている。子どもの発達のさまざまな側面について訓練を受けた「カデル」と呼ばれるコミュニティの女性が栄養センターで親や家族のためのワークショップを開いている。1997年に経済危機がこの国を襲ったときには、すでにこのシステムができていた。世界銀行はこのECDプログラムのためにインドネシアに2150万米ドルを融資した。このブ

ユニセフが支援しているスロベニアの知的障害児施設の庭の落ち葉の上で遊ぶマケドニアの子どもたち。



UNICEF/95-08501/Lemovic

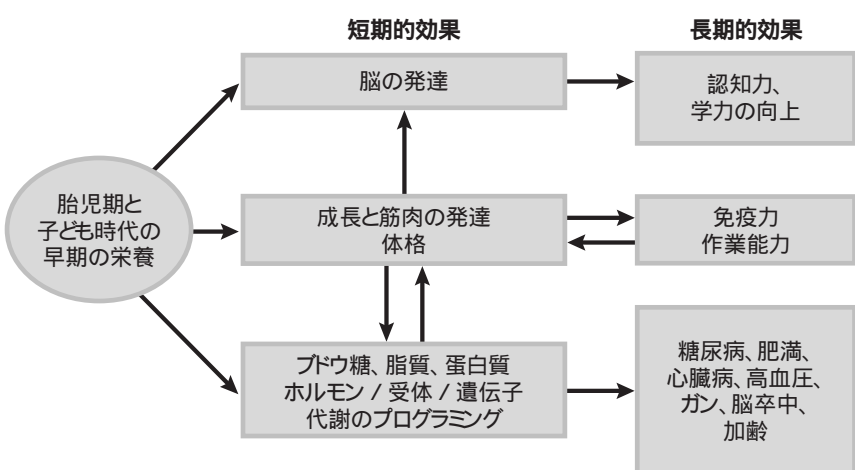
子どもの病気、障害、死の多くの原因のうち、容易に防げるにもかかわらず、最も影響が大きく、長期的に悪影響を残すのは、妊娠中の母親の不健康である。このような原因による子どもの死は許すことができないが、1人当たりわずか年間3米ドルの措置によって回避し、防ぐことができる。

健康な妊娠は明らかに女性や子ども、社会全体に大きな恩恵をもたらす。子どもを産

む女性は適切な栄養、出産前後や出産時の優れたケア、産科ケア、汚染や体力を消耗する労働や紛争などによる極端なストレスのない環境を必要とする。たんぱく質やビタミンA、鉄分の補給や強化など、妊婦の栄養に投資することが多くの報酬をもたらす。子どもを産む女性の栄養不良をなくすことが、その乳児の障害をほぼ3分の1も減らす。リスクを抱えた乳児の場合は、早期のケア

プログラムが障害を減らすうえで役立つ。女の子や若い女性は教育を受ける機会を得て、子どもをよりよく育てられるようにならなければならない。女性は年齢を問わずHIV / エイズや性感染症の検査を受け、父親も育児教育を受けるべきである。コミュニティはきれいな水と衛生を必要とし、社会は女性を尊敬し、差別しない雰囲気を生み出す価値観や立法を必要とする。

図3 早期の栄養の短期的、長期的効果



資料：『2020年までに栄養不良をなくす：新しいミレニアムにおける変化のための課題』、21世紀の栄養の課題委員会がACC / SCNに提出した最終報告、2000年2月。図3と図4はA・C・J・ラベリほか、「出産前に飢餓に苦しんだ女性の耐糖性」、ランセット誌351(9097)、1998年1月(著作権はランセット誌)。

図4 飢餓が母体に及ぼす影響

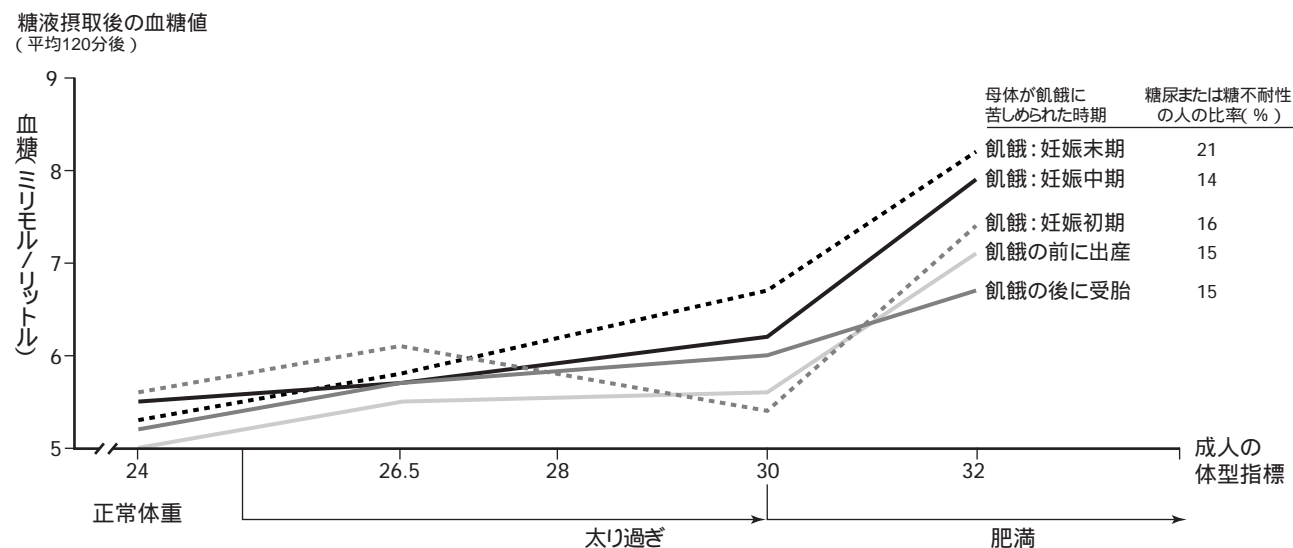
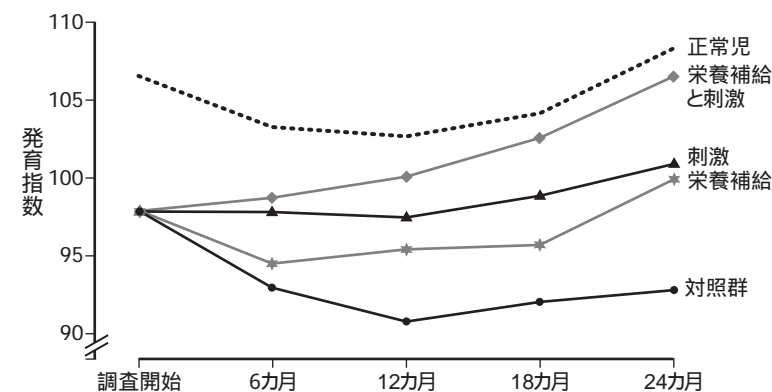


図5 早期のケアが発育阻害の影響を緩和する



資料：S・M・グランサム・マクグレゴールほか、「発育阻害児の栄養補給、社会的刺激、知的発達：ジャマイカでの調査」、ランセット誌338(8758)、1991年7月、1～5ページ(著作権はランセット誌)。『2020年までに栄養不良をなくす：新しいミレニアムにおける変化のための課題』、21世紀の栄養の課題委員会がACC / SCNに提出した最終報告、2000年2月、10ページから転載。

プログラムには「取り残された村(インプレス・デサ・テルティンガル)」と呼ばれる最貧のコミュニティの生後6～24カ月児のための緊急食糧支援が含まれた。栄養不良がそれらの村の乳児の心身の発達を恒久的に遅らせるのを防ぐために、25万人以上の乳児に2年間にわたってカロリー、たんぱく質、栄養素を補給するための計画が立案された。このプロジェクトではボランティアによる既存の村の保健相談所やBKBプロジェクトを活用して実施される予定である⁽⁸⁾。

世界中で、親やコミュニティは子どもの発育と発達を助けるための創造的な方法を考案した(国のプロフィールを参照)。それらは優れた衛生環境や衛生習慣、適切な栄養、食事の適切な与え方、予防接種、発育観察、社会心理的刺激、障害の早期発見と早期の介入を重視するものになっている。

たとえばスリランカでは刺激や遊び、算数や識字の準備に力を入れた家庭訪問プログラムや就学前教育が、マドゥシカやマドゥジャラの幼い子どものすばらしい成長に役立っている。

だがスリランカで役立つことが必ずしもインドネシアやナミビアで役立つわけではない。早期ケアに対する投資は、コミュニティこそが、保護者のニーズや幼児の発達の里程碑にマッチし、家族の文化や価値観を反映して成功するプログラムの最善の築き手であるという事実を指針に行われなければならない。

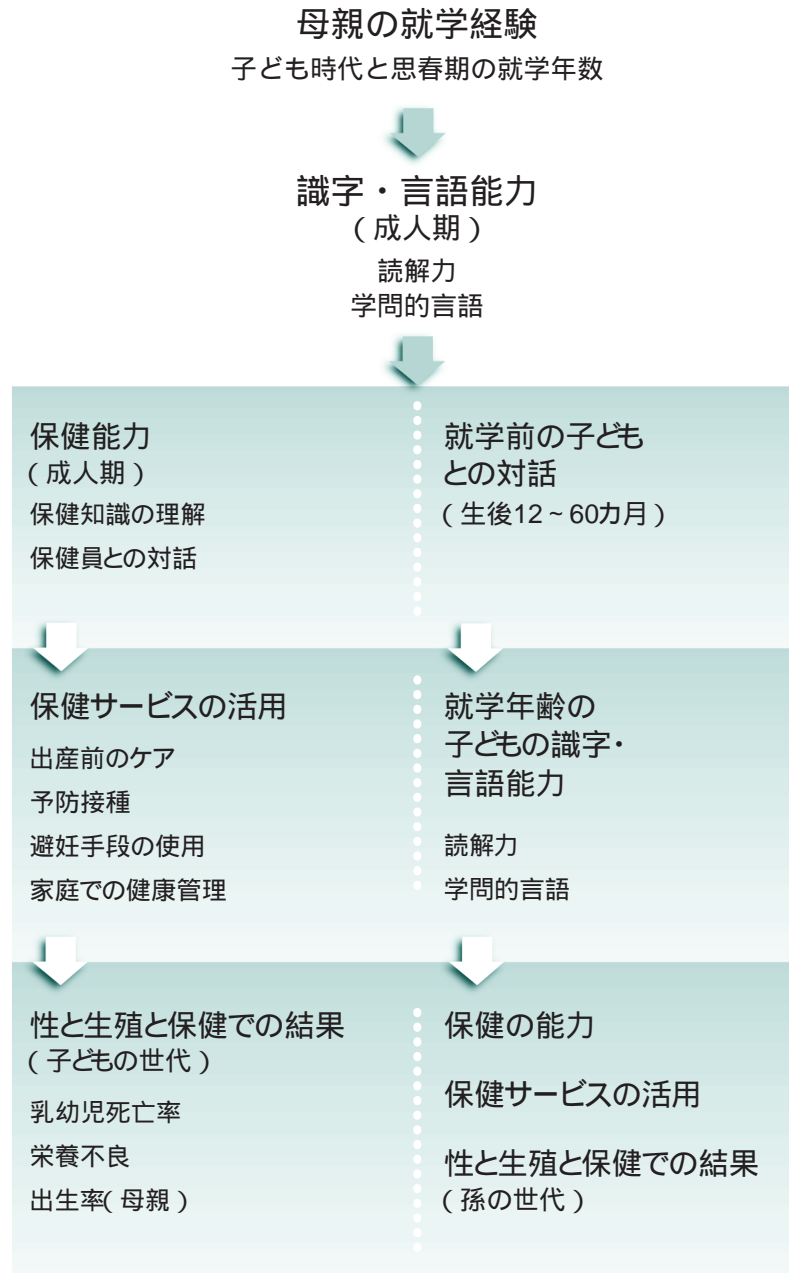
たとえばブラジルでは子ども管区(バスタラル・ダ・クリアンサ)のボランティアが訓練を受けてコミュニティの保健担当者になっている。ほとんどが女性で家庭を訪問して母親に家族計画や出産前のケア、母乳育児、ORT(経口補水療法)の知識を与え、赤ちゃんの体重を計り、幼い子どもを抱き、子どもに話しかけ、歌を歌い、対話の大切さを教えている。そうした努力の結果、子ども管区のボランティアが活動しているコミュニティでは子どもの死亡率が60%も低下した⁽⁹⁾。

子ども管区の活動の一部としての予防接種や発育観察によって、発達の遅れや障害もある程度予防されている。親たちは赤ちゃんの成長の目安について教えられると、リスクを抱える赤ちゃんの第一線の守り手になる。

障害が早期に発見されると幼児、とくに0～3歳



Sarah Perera/Sri Lanka



資料：R・A・ルバイン、S・E・ルバイン、B・シュネル、「女性のための改善：学校教育の普及、女性の識字と世界的な社会変化」(未発表原稿) 2000年2月、図2。

悪を助長していた地域の託児所で民族和解の種子がまかされている。かつては「白人専用」とされたヨハネスブルクの公園の片隅の貧しい地域で、イムピロ(生命)と呼ばれるプロジェクトが人種を問わず若い子どもに包括的でユニークなケアを提供している。ECDが親やコミュニティと協力して紛争ではなく問題解決を促進し、不寛容ではなく受容を奨励するとき、子どもが家族や社会の平和を促進するような生き方をするための基礎が築かれる。

ECDが当初の計画段階からコミュニティの

参加を得て立案されるような場合は、その当然の恩恵としてコミュニティが力強く、エネルギーに満ちたものになる。たとえばナイジェリアでは「行動のためのコミュニティレベルの栄養情報システム」(COLNISA)がコミュニティによる分析に基づいて、保健施設と病院をリンクさせる「赤ちゃんにやさしいコミュニティ」を設けている。現在32のコミュニティが完全母乳育児や適切でタイムリーな離乳食の与え方、家族の衛生環境の改善を推進して、子どもの健康な発達のために努力している。

カメルーンでは「東部カメルーンの住民の自己啓発協会」という地域のNGOが国内の最も遠隔の赤道林地帯に正規の教育制度以外の就学前教育センターを設けて、伝統的な遊牧民のバカ・ビグミーの子どもを就学に備えさせている。ユニセフが支援している60以上のセンターでは0~12歳児のためにビグミーの文化や言語に即した授業方法が採用されている。

各種サービスの統合：既存の部門にはECDプログラムのための多くの入口があり、国際機関や各国政府、地域社会がすでに実施していることを基礎にしてプログラムを実施することができる。たとえば栄養プログラムは出産前の優れたケアや生後6カ月間母乳だけを与え、母乳育児を2年以上続けることの重要性を教えることに焦点を絞ると同時に、早期の社会的・情緒的・認知的刺激の大切さについて母親を教育することもできる。たとえばオマーンでは、もともとは母乳育児の促進を任されていた女性のコミュニティワーカーのネットワークに、子どもの幅広い早期ケア問題について母親に助言するための訓練を行った。コミュニティの保健システムが子どもの発達の入口になっている国もあれば、遊びや探求のための安全なスペースを確保する方法を水と衛生プログラムに取り入れている国もある。

ECDの最も重要な側面の一つは、すでに存在するものを効果的な基礎にできる点にある。ECDとは車輪を新しく発明し直そうとするのではなく、親やコミュニティに必要な支援を与え、既存の資源を最大限に活用するのである。既存の保健、栄養、水、衛生施設、衛生習慣、教育、子ども保護プログラムを利用できるので、それらのサービスを統合し、あるいは組み合わせることで全人としての子

どもの発達に役立てることができる。ブラジルの子ども管区は子どものための早期サービスを保健部門を通じて統合させた例である。コロンビアの教育改善プロジェクト(PROMESA)では教育部門を軸にして各種のサービスを総合し、母親グループが教育プログラムで0~6歳児の身体的・知的発達の刺激法を学んでいる。

だがECDが成功の機会をつかむ前に、子どもの権利についての理解を広げ、子どもの権利を実現するために必要な資金を費やし、なすべきことをするという決意が不可欠である。

子どものケアは女性のケア

赤ちゃんやよちよち歩きの子どものケアを重視することはまた女性を重視することを意味する。女性の身体的・情緒的条件が妊娠や赤ちゃんの発達に影響するからである(囲み記事3)。

出産前の母親のケアの不足や栄養不良が子どもの低出生体重、聴覚障害、学習の困難、二分脊椎、脳の損傷の原因となり得ることは、これまでも指摘されていた⁽¹¹⁾。体重不足の母親から生まれた子どもは成人してから糖尿病や心臓血管疾患、肥満などの病気や症状に苦しむ傾向がある⁽¹²⁾。

1990年の「子どものための世界サミット」は妊産婦の健康が子どもにとって重要なことを認めて、妊産婦の死を2000年までに半減することを求めた。1993年にウィーンで開かれた世界人権会議は女性の権利が人権であることを再確認し、1994年にカイロで開かれた国際人口開発会議はリプロダクティブヘルス(性と生殖に関する健康)を含む女性の健康が持続可能な開発に不可欠だと主張した。1995年に北京で開かれた第4回世界女性会議とその5年後のニューヨークでのフォローアップ会議では、女性の健康の改善が21世紀のジェンダーの平等、開発、平和のために優先すべき行動の一つであると指摘した。

ところが妊産婦の死亡率はなお高く、開発途上国の女性は先進工業国の女性に比べて妊娠出

産による合併症で死ぬ確率が平均して40倍も高い⁽¹³⁾。

ハンガリーでの調査では、母親が出産で死亡すると、残された赤ちゃんが死亡する確率が両親が健在な子どもの3~10倍に達することが明らかになった⁽¹⁴⁾。母親のケアの強化が子どもを守ることになる。ユニセフ、WHO(世界保健機関)、UNFPA(国連人口基金)、世界銀行はそのことを認めて多くのパートナーとともに世界の母性保護イニシアチブを推進している。

異なった文化のもとでも、子どものケアと女性のケアの関係には共通の認識がある。ハンガリーでは妊婦のケアが赤ちゃんの健康なスタートの基礎になることを認めて「母性保護デー」を設け、政府、保健関係者、各種の機関を動員し、報道機関のキャンペーンの支援を得て妊産婦の死の背後にある社会問題に取り組んでいる。安全で健康な妊娠を守るためのハンガリーでのこの努力が結局は赤ちゃんのケアを強化する。

妊婦には適切な食事や保健サービスが大切だということを家族に教え、妊娠した妻のケアや子

最も幼い時期こそが
充実した人生の
スタートを
切るための
最善の時期
になる。

中国陝西省の旬邑町付近で荷車から降りたばかりの土をならす女性の。荷車には土の代わりに赤ちゃんが。





UNICEF/P0-03645/Schylte

で果たす大きな役割を重視するものである。世界中の男性が直接の体験を通じて子どもの暮らしにどう貢献するかを学び始めている。

たとえばナミビアでは村の渉外係が「父親の集会」を呼びかけて村民の関心を集めた。村の渉外係は男性がもつ競争心に着目して、盤の上で駒を動かす「ECDに参加している父親だけ」のた

めของเกมを考案した。盤には子どもと遊び、子どもをケアする男性をさまざまにスケッチした一連のブロックがあり、父親がカードを抜いて「子どもは遊びで何をやるか」などの問いに答えて振り出しからゴールに向けて進むようになっている。父親が問いに答えると、グループがその答を採点し、父親が思慮深い正しい答をしたと判断すれば、父親は駒を先に進めることができる。

ヨルダンでは「育児改善」プログラムに参加している父親が小さなグループをつくり、夜にコミュニティーセンターや村のリーダーの家に集まって、家のまわりにある資料を使って子どもの遊び場をつくる方法を学んでいる。遊びや踊り、入浴、食事など、父親の愛情に満ちたケアが子どもの発達をどのように促進するかについても話し合っている。

父親の役割についての調査で、子どもの暮らしに積極的に関わっている男性は本能的に何かを知っていることが裏付けられた。つまり男性が家族の単なる稼ぎ手や厳格な人以上の存在になると、家族のみんなが得をする。父親はこれまで常に実権を握っている人だとみなされてきた。だがいまではその経済力や権威と並んで養育者や保護者としての父親の影響のある役割が重要になっている。

父親が子育てに参加すると、子どもが健康になるだけでなく、知的により鋭敏になり、情緒的にも安定する。バルバドスで8歳児について調査した結果、父親が子どもと一緒に暮らしている場合でもそうでない場合でも、父親が子どもの暮らしに積極的に関わ

ると、子どもの学業成績が改善することが分かった。米国での調査でも、父親との関係が強い乳児は就学前の知能テストで他の乳児よりも高い得点をあげていることが分かった。父親の献身は子どもの成績を上げるだけでなく父親が子どもと一緒に遊び、歌い、笑うと家族が仲よく幸せに暮らす機会が多くなる。

「パパ・イニシアチブ」は2年前に始まってから男性や10代の少年をジェンダーに基づく固定的な役割の見直しに参加させて、男性や10代の少年を子どもの未来の築き手にすることを目指してきた。男性たちは子どもの発達について具体的な事実を学んでいるだけではなく、世代から世代へと引き継がれてきた価値観の見直しにも取り組んでいる。だが母親の役割や父親の役割や息子や娘に対するそれぞれの期待についての長い間の考え方を考える戦いは、容易ではない。

このプログラムの指導員をしている24歳のジェシカ・アベラネダ・ガルシアは「男らしさの誇示は一夜ではなくせません。ですが前進がみられ、男性たちは以前よりも意思疎通をはかり、家での女性の仕事を評価し、子どもと対話しようとするようになっていようです」と語った。

父親たちは古い固定観念を棄てて子どもと一緒に歌い、子どもに物語を読んで聞かせ、子どもの意見を聞き、子どもに食べさせ、子どもを抱き、子どもと遊ぶことが息子や娘の心身を健全にすることを学びつつある。子どもの自尊心を育てるうえでも寛容と愛情が大切だということが理解され始めた。

父親たちは古い固定観念を棄てて子どもと一緒に歌い、子どもに物語を読んで聞かせ、子どもの意見を聞き、子どもに食べさせ、子どもを抱き、子どもと遊ぶことが息子や娘の心身を健全にすることを学びつつある。子どもの自尊心を育てるうえでも寛容と愛情が大切だということが理解され始めた。

10代のグループに参加している父親のブラウリオ・ガルベス・グチエレスは「私は忍耐強くなることを学びました。子どもは小さいので、辛抱強くしなければなりません。ですから子どもたちの好奇心を生かして子どもに教える方がよく、そうすることで子どもがよく学ぶようになります。私は息子に向かって大声をあげたりしないようにしています。いまでは息子にもっと愛情を注ぐようになりました」と語った。

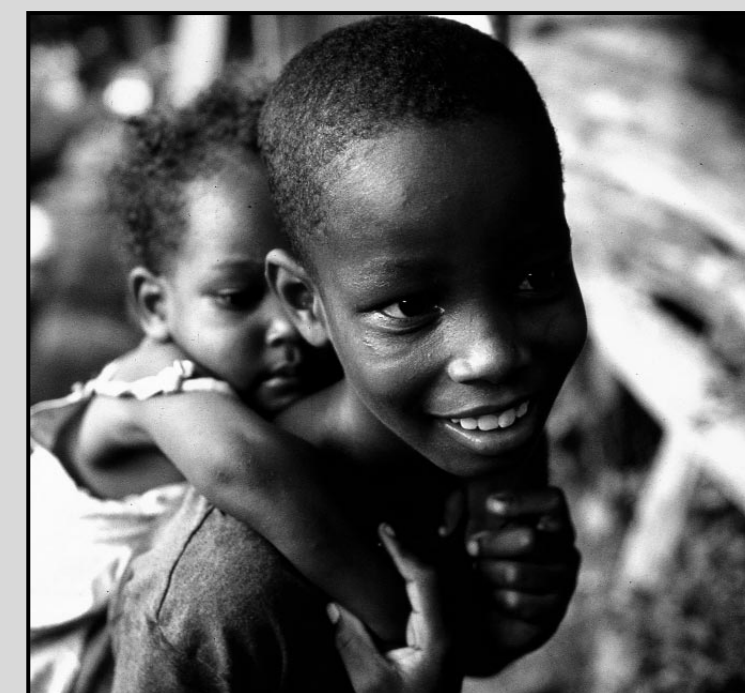
父親たちは古い固定観念を棄てて子どもと一緒に歌い、子どもに物語を読んで聞かせ、子どもの意見を聞き、子どもに食べさせ、子どもを抱き、子どもと遊ぶことが息子や娘の心身を健全にすることを学びつつある。子どもの自尊心を育てるうえでも寛容と愛情が大切だということが理解され始めた。

父親たちは古い固定観念を棄てて子どもと一緒に歌い、子どもに物語を読んで聞かせ、子どもの意見を聞き、子どもに食べさせ、子どもを抱き、子どもと遊ぶことが息子や娘の心身を健全にすることを学びつつある。子どもの自尊心を育てるうえでも寛容と愛情が大切だということが理解され始めた。

父親たちは古い固定観念を棄てて子どもと一緒に歌い、子どもに物語を読んで聞かせ、子どもの意見を聞き、子どもに食べさせ、子どもを抱き、子どもと遊ぶことが息子や娘の心身を健全にすることを学びつつある。子どもの自尊心を育てるうえでも寛容と愛情が大切だということが理解され始めた。

父親たちは古い固定観念を棄てて子どもと一緒に歌い、子どもに物語を読んで聞かせ、子どもの意見を聞き、子どもに食べさせ、子どもを抱き、子どもと遊ぶことが息子や娘の心身を健全にすることを学びつつある。子どもの自尊心を育てるうえでも寛容と愛情が大切だということが理解され始めた。

写真：グアテマラの父と息子。



UNICEF/P0-8845/Jamaica/Ashtok

ジャマイカの農村で

ジャマイカでは出産の20%以上が15～19歳の少女によるもので、10代の母親は「巡回育児支援プログラム」の支援を受けている。このプログラムでは、10代の母親がカウンセリングのための集会や学習に参加し、職業訓練を受け、自尊心を高めるための活動に参加している間、デイケアセンターで赤ちゃんのケアをする。センターでは、赤ちゃんの父親や10代の母親のための特別な集会も開いている。

若い親たちはそれぞれのコミュニティーでグループ集会に参加し、診療所を紹介され、現金収入を得るための職業訓練や支援を受けている。仲間とともにリプロダクティブヘルスや母乳育児の利点、適切な栄養、環境衛生と安全についても学んでいる。

プログラムの拠点の多くが集中するジャマイカ中部の農村地区では「巡回育児支援員」が各戸を訪問して、0～3歳児の親に子どもの発達を促進するケアの仕方を直接指導する。「育児支援員」は地元中等教育を終えた若者で、定期的に子どもの発達に関する訓練を受けている。1人で約30家族を担当し、親が子どもの発達の優れた観察者になることができるように支援し、子どもの発達にふさわしい家庭学習環境を作っている。育児支援員は隔月に集会に参加して、担当する家族の前進について報告し、活動を立案し、訓練のための教材を準備する。親や保護者や子どもも玩具や教材を作って、プログラムで使っている。

「巡回育児支援員」プログラムは自由で多元的で総合的な児童発達・育児教育プログラムの一部であり、地域社会、ジャマイカ政府、ユニセフ、ベルナルド・パン・リア財団、農村家族支援組織の協力活動として1992年に開始された。

プログラムは「危険の大きい」家族が0～3歳児の発達のニーズを満たすのを支援する目的で創設され、すでに農村の25地区の700家族の3500人以上の子どもと、困窮世帯が暮らす都市の11のコミュニティーの1300人の子どもが、このプログラムの恩恵を受けた。

もの養育で男性が重要な役割を果たすことを男性に教えることもECDの一部になる(囲み記事4)。父親や母親が健康な妊娠や子どもの発達のためにどのような支援が必要かを知れば、保健上有害な慣習をなくすことも可能である。

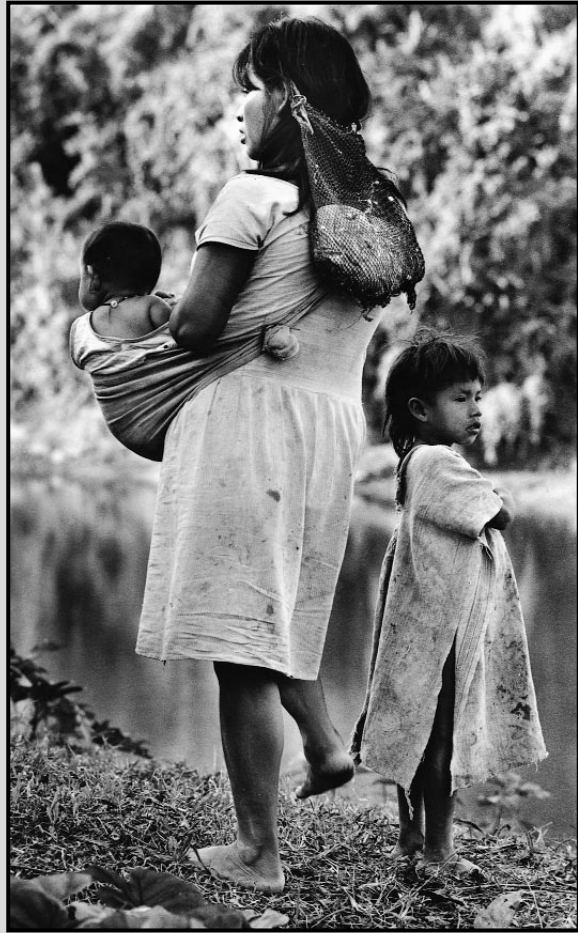
女性の前進は子どもの前進：女性の権利が守られなければ、子どもへの責任を果たすことはできない。女性の権利は保健と教育の2つの分野で子どもに直接の影響を与える。乳児の死は妊娠前や妊娠中や出産直後の母親の栄養や健康状態の悪さと深い関係があり、出産前のケアを改善することが母子の命を救う。20世紀後半にアフリカ、アジアの大部分、ラテンアメリカで女子の就学率が高まったことが、出生率や死亡率の低下に貢献した⁽¹⁵⁾。

認知刺激や社会的対話を含むECDが重視され始めるとともに、女子の教育の機会を拡大することがこれまでもまして重要になった。グアテマラの女性についての調査結果から、母親の就学期間が長ければ長いほど、母親が幼児と話す時間が長く、母親が子どもの先生の役割を果たす機会が増えることが分かった⁽¹⁶⁾。

女性の権利は人権であり、ECDは母親だけではなく、女性全体に恩恵を与える。ジェンダーに基づく偏見や不平等は文化的伝統に深く根差しているが、ECDはジェンダーに基づく不平等をなくし、女性の暮らしを改善するためのきっかけになる。たとえば新しく父親と母親になった夫婦のための育児プログラムなどのサービスが、家族のなかの人間関係や女兒にできることについての家族の見方を変え、早い段階でジェンダーに関する偏見の核心に迫ることができるという証拠が増えている⁽¹⁷⁾。

希望と変化の循環

子どもと女性の権利を保障するための戦略的アプローチによって、いま世界の子どもや若者の生活や心を蝕んでいる貧困、病気、暴力、差別の悪循環を断ち切る大きな可能性が生まれる。このアプローチはすべての乳児が生存、発育、発達の可能な最善の機会を保障され、すべての子どもが就学に備え、すべての学校が子どもの受け入れに備えることを約束する。このアプローチはま



Monica Newton/Peru

ないように守られる。

先進工業国の都市やケニアの大平原、仏領ギアナのジャングルのいずれであろうと、親は同様な責任を感じて自分の子どもを守り、その食糧を確保し、体を清潔にし、健康にして、子どもの成長と発達を助けている。その方法は、それを生み出す文化と同様に多様で、コミュニティの価値観や考え方を反映し、子どもの文化的アイデンティティや子どもが享受する基本的な権利の基礎となり、子どもや若者の生き方や子どもが成人してからの子育ての仕方に影響を与える。

妊婦の食事に関するタブーや女性の性器切除などの伝統的悪習は母子の双方に有害なので、明らかに廃止する必要がある。だ

が伝統的な慣習のなかには赤ちゃんの発達のニーズに応え、その見かけとは違って近代的な育児の考え方に近いものも多い。

アフリカやラテンアメリカの一部の社会には母親と新生児が生後数日から数週間、自らを外界から「隔離」するために家のなかに閉じこもるといった伝統的な慣習がある。母親はこの期間中は、家族の介護を受け、食べ、授乳し、子どもとのきずなを強める以外は何もしない。この慣習が秘める知恵はほぼすべての先進工業国や開発途上国の多くに引き継がれて、働く母親は産休の法的権利を保障されている。

効果的な伝統的慣習のもう一つの例としてケニア、ニューカレドニア、スマトラの母親たちが自分の口に水を含んで新生児に吹きつけて、新生児の体を清めていることをあげることができる。マサイ族の母親は新生児に水を吹きつけ、スマトラのバタク族の母親やガイアナのワヤピ族の母親は口に含んだ水を霧のように吹きつける。水を新生児に吹きつける方法はさまざまだが、すべての赤

ちゃんが湯で清められている。

コートジボワールのパウレ族の赤ちゃんは毎日2度沐浴し、湯と石鹸と植物性のスポンジでこしこし洗ってもらふ。母親が赤ちゃんを2度洗ってすすいでから、むずかる赤ちゃんを胸に抱いて泣きやませる。次いで赤ちゃんの体をさすり、尻や肩を伸ばしてしこりをほぐし、頭を押して形を整える。赤ちゃんはクリームを塗り、パウダーをすり込み、香料やカオリン(白く柔らかい粘土)を塗ってもらふ。身づくろいのこの段階で赤ちゃんは泣きやみ、大きな目をぱつぱつとあける。この儀式が終われば、はっきりと目覚めて、活発で機嫌のいい赤ちゃんは、家族に渡されて、その手で抱きかかえられる。

さまざまな文化のもとでは、親や保護者が赤ちゃんを抱くのは赤ちゃんを移動させるための自然な方法で、そうすることが同時に赤ちゃんを守り、幼い筋肉を鍛え、刺激を与える方法でもある。背負いひも、腰帯、ヒョウタンの実で作ったかごや揺りかごのなかで移動するとき、赤ちゃんはいつも母親のそばにいる。母親の腕に抱かれ、母親が働くときは母親に背負われてさまざまな活動に参加しながら、絶えず触感や視覚刺激を受ける。

母親が道を走るときには上下に揺さぶられ、父親がナイフを研ぐときには地面にかがみ込み、自分を抱いてパーティで踊るときには、絶えず筋肉を使ってその動きに合わせている。

ベネズエラのエクアナ・インディアンは赤ちゃんが生まれた瞬間からはいはいするようになるまで赤ちゃんを抱いて運んでいる。ジャワの赤ちゃんは1日の大部分を母親の胸を覆う肩掛けのなかで過ごすので、母親は赤ちゃんの求めに応じていつでも授乳できる。赤ちゃんを危険から守るため生後7カ月になるまで赤ちゃんの足を地面につけさせることはない。

人々はいまでは、母子の引きこもりの期間や赤ちゃんを抱えている間に母親との早期のきずなが強まり、赤ちゃんがほしがるときにいつでも授乳できることが赤ちゃんの安全感や他人への信頼や自尊の気持ちを強めると考えるようになった。西側世界でもいまではますます多くの母親が赤ちゃんをベビーカーから出して背負いひもで運ぶようになった。

そうした習慣が赤ちゃんの感覚を刺激し、発達を促す。近代的慣習とは相入れないように見える子どもを守るための神秘的な儀式の伝統でさえも、幼児のニーズをいかに巧みに満たしているかについての綿密な検討に値する。

資料:
ジュディス・L・エバンスとロバート・G・マイヤーズ、「育児の慣習: 伝統と近代的慣習の接点でのプログラムの立案」[<http://www.ecdgroup.com/cn/cn15lead.html>].

ベアトリス・フォンタネルとクレア・ダルクール、『祝福された赤ちゃん』、ハリ・N・エープラムズ、ニューヨーク、1998年。

ジャン・リードロフ、『連続の概念』、ベルセウス・ブックス、1975年。

ジュディス・ティムヤン、「社会心理的発達の文化的諸側面: 西アフリカの育児慣習の検討」、ユニセフの地域ワークショップ報告、アビジャン、1988年1月18-22日。

マリアン・F・ゼイトリンほか、『家族を強化する: 国際開発にとっての意味』、国連大学出版局、ニューヨーク、1995年。

た子どもと若者に社会に参加し、貢献する機会を与えるものである。

このアプローチは子どもの発達のすべての段階が互いに関連し、できるだけ早い時期に充実した生活へのスタートを切ることが望ましいという事実に基づいている。

健康な赤ちゃんは就学や学習にふさわしい、心身ともに強い子どもになる可能性が高い。そうした強い子どもは成長して社会に役立つ若者になり、学習を続け、結婚時期や出産を遅らせ、危険な妊娠を避け、次の世代の子どものために健全な基礎を築く可能性が高い。最も早い時期に子どもに投資することが、社会の悪循環を断ち、希望と変化の循環を生み出す。

国がいま、家族の暮らしを締めつけ、開発を阻んでいるのを緩めようとするなら、次の4つの、等しく必須のことを同時に実施することが求められる。

1. 引き続き子どもの生存を優先する。
2. 子どもが健康で、技能をもち、生産的で充実した暮らしができるようにする。
3. 親が育児で中心的役割を果たせるようにし、コミュニティの能力を高めて親を支援できるようにする。
4. あらゆる暴力や差別をなくし、子どもと女性の暮らしや貢献を大切にす社会を生み出す。

国連子ども特別総会

2001年9月に国連子ども特別総会が開かれると、政府の指導者やNGOは「子どもの権利条約」の原則を適用し、1990年の「子どものための世界サミット」で採択された目標を達成するという課題に引き続き取り組むことを求められると同時に、子どものための新しい課題を設定することになる。政府の指導者やNGOは最年少の市民にとって最善のものが結局は国にとって最善のものであることを忘れてはならない。